

病や障害を抱えた当事者が語る「当事者参加型授業」の教育効果

柴田貴美子, 水野高昌, 安永雅美, 黒澤也生子, 宮寺亮輔

文京学院大学 保健医療技術学部 作業療法学科

要旨

本研究の目的は、障害者就労に関する科目の中で、当事者参加型授業を実施し、聴講した学生にどのような効果があるのかを明らかにすることである。32名の学生を対象に、当事者参加型授業の実施後、「学びの内容」と「今後の自己の課題」について自由記述式の質問紙を用い、ベレルソンの内容分析を用いて検討した。その結果、学びの内容については10カテゴリ、今後の課題については7カテゴリが抽出された。学生は、OTとしての役割や援助内容について理解し、当事者の視点から就労の意味や援助内容などの理解を深めていた。更に、単に知識不足であることだけではなく、対象者に適した支援ができるよう自分なりに知識を組み合わせ、展開する力が不足していることを実感していた。当事者参加型授業では認知的領域だけではなく、情意的領域にも効果が認められることが示唆された。

キーワード

当事者参加型授業, 教育効果, 体験談

1. 緒言

近年、障害者の雇用は2002年より始まった障害者就業・生活支援センターの設置をはじめ、2006年には精神障害者を障害者雇用率のカウントに含むなど制度の面からも進展してきている。2011年11月の統計では、雇用障害者数は36万6199人と過去最高を更新し、民間企業に雇用されている障害者数も過去最高であった。2013年4月より民間企業の障害者雇用率を現行の1.8%から2.0%へ引き上げに伴い、雇用される障害者も増加することが予測される。それに伴い、障害者を援助する医師をはじめ、作業療法士（以下、OT）、看護師、精神保健福祉士など医療従事者は、障害者就労に関する知識が必要となる。学生時代に「就労援助」に関する科目を受講しても、臨床実習では就労活動をしている対象者を受け持つことや見学することは

少ない。むしろ、著者自身OTとして働く中で、就労活動をする対象者に巡り合い、対象者と共に知識・技術を学んでいたように感じる。机上でしか学ぶことのできない学生にとって、就労援助はイメージしにくいものであろう。

1963年、わが国で初めてOTの養成教育が開始され、もうすぐ50年を迎えようとしている。養成校ならびに入学者数が増え、OT教育が過渡期を迎えているのは自明である。医学教育はこれまでの知識伝授型学習から、Problem Based Learning (PBL) の実施も含め、問題解決型学習へと転換が図られている。2002年、文部科学省は、薬害被害者からの体験談を直接聞く特別講義の実施を医学、薬学、看護学系大学に呼びかけ¹⁾、実際、障害や病を抱える当事者から直接体験談を聞く試み（以下、当事者参加型授業）は、看護、福祉の領域で実践されている。

わが国における当事者参加型授業の効果を検討した文献

レビュー²⁾では、授業時間は1コマ90分で1回実施し、複数の当事者が参加し、障害に至るまでの経緯や、現在の生活の様子など体験を語るものが多かったと報告されている。当事者の理解、看護技術の向上、疾病理解を当事者参加型授業の目的としており、授業評価からこれらの目的が達成され、その他に当事者へのイメージが変化し、当事者に勇気づけられ敬意を払う姿勢が養われるなど、情意的領域にも効果が認められることがわかった。

岩崎³⁾は、OT教育では認知・情意・精神運動領域のどの領域にも偏らない人材育成が望ましいと述べている。当事者参加型授業では認知的領域だけではなく、情意的領域にも効果が認められ、主体的に考え、行動するOTを育成するためにも、当事者参加型授業は有意義な方法であると考えられる。作業療法教育の中で当事者参加型授業の効果について述べた研究⁴⁾は、1件のみである。この研究では、当事者参加型授業を受けた後、学生の情動知能や知識の深まり、自己への気づき等が高まったことについて、アンケートを用い量的に分析・報告している。

一方、看護教育では、当事者参加型授業を実施し、何を学び、何を課題として感じたのかを質的に検討しているものが多い。前述したように作業療法教育においては、当事者参加型授業が与える影響について、質的な検討は充分されているとは言えず、ゆえに独自の効果が得られるかなど探索的な研究が必要と考えた。そこで本研究では、「障害者就労に関する科目の中で、当事者参加型授業を実施し、聴講した学生にはどのような効果があるのか」について、質的な研究手法を用いて明らかにすることを目的とした。

なお、本論において当事者とは「疾患や障害を抱えた患者」、当事者参加型授業とは、「当事者を教育機関に招き、通常の授業時間枠の中で行われる当事者が自身の体験を語る授業」と定義する。

2. 方法

2.1 対象

就労援助学を受講した文京学院大学作業療法学科3年生32名（男性8名、女性24名）、平均年齢は20.26±0.51歳であった。

2.2 当事者参加型授業の概要

就労援助学は「職業リハビリテーションに関連する法・制度および最新の情報等により、知識を深め広い視野を持つこと。さらに、障害をもつ人の就労支援に関連する基礎知識と技法を習得すること。就労援助に関する作業療法の評価、支援方法を習得すること」を目的に1単位30時間で展開している。そのうちの2時間を当事者参加型授業にあて、それまでの講義内容も踏まえ、OTとしての役割や援助内容について理解し、当事者の視点から就労の意味や援助内容などの理解を深めることを狙いにしている。

当事者参加型授業の参加者は、文京学院大学作業療法学科3年生32名、当事者1名（以下A氏）、B病院精神科デイケアスタッフ（OT、以下スタッフC氏）1名、教員2名の計36名であった。A氏は統合失調症でB病院の精神科デイケアを利用し、現在は就職してデイケアを終了したOBである。スタッフC氏は、A氏を担当していたスタッフである。

授業は、表1に示すような内容で展開した。A氏ならびにスタッフC氏からの語りは、各自が作成したパワーポイントを併用した。A氏は病歴、デイケアでの活動内容、社会資源を使った就労活動、就労の実際について順に語った。スタッフC氏は、デイケアの概要と当事者にどのような援助を実施したのかについて語った。

2.3 調査方法

授業の開始前、書面と口頭にて調査対象の学生に趣旨を説明し、同意を得た。本授業の終了後、質問紙を配布し、回収した質問紙の中で全ての項目に回答がされていたもの

表1 当事者参加型授業の内容

内容
1 導入(当事者参加型授業の進め方と当事者, スタッフ紹介)
2 当事者による体験の語り
3 精神科デイケアスタッフによる体験の語り
4 質疑応答
5 まとめ

を分析対象とした。

2.4 調査内容

質問紙は学生の背景を明らかにするための基本属性（年齢、性別）と、「この授業で学んだことは何ですか」、「今後の自己の課題は何ですか」という質問を提示し、自由記述による回答を求めるものを作成した。

2.5 分析方法

分析の対象は「この授業で学んだことは何ですか」、「今後の自己の課題は何ですか」という2つの自由記述式の回答である。この回答をベレルソンの内容分析⁵⁾を用いて分析した。一名の回答全体を文脈単位とし、文脈単位からそれぞれの問いに対する回答1つを含む文章を記録単位とした。記録単位からサブカテゴリに集約し、カテゴリ分けを行った。

2.6 信頼性を確保するための手続き

研究者2名で記録単位からサブカテゴリに集約し、カテゴリ分けを行った。他の研究者2名により、全記録単位をカテゴリにあてはめ一致率を計算した。カテゴリ分類への一致率をスコットの式に基づき算出し、分析結果の信頼性を検討した。一致率の判定について基準は示されていないが、70%以上の一致率を示した場合には、カテゴリが信頼性を確保していると判断するという報告⁵⁾がある。この報告を基に、本研究においても、一致率が70%以上の場合は信頼性を確保していると判断することとした。

2.7 倫理的配慮

学生に対しては、アンケートに協力しなくても、成績評価等で不利益が生じることはないことを口頭また書面にて説明した。なお、本研究は文京学院大学倫理委員会の承認を受け、指導方針に従い同意を得た上で実施した（承認番号2012-25）。

3. 結果

対象者32名全員から回答が得られた。以下に、「学びの内容」と「今後の自己の課題」に分け、形成されたカテゴリについて、記録単位数の多い順に述べる。

3.1 「学びの内容」の内容分析結果

「学びの内容」の記述は73記録単位に分割できた。その後サブカテゴリに集約し、さらに高次の概念でカテゴリ化

を行った結果、10カテゴリが形成された（表2）。研究者2名による信頼性の検討の結果、スコットの一致率はそれぞれ79.2%、71.0%であった。

1) 就労支援におけるOTのあるべき姿

このカテゴリは16記録単位から形成され、記録単位数の21.9%に該当し、3つのサブカテゴリ「就労支援におけるOTの役割と必要性」、「様々な職務内容についての知識の必要性」、「OTになった時の自己像」から構成された。

2) 当事者の視点と思い

このカテゴリは15記録単位から形成され、記録単位数の20.5%に該当し、4つのサブカテゴリ「サービス利用者としての当事者の視点」、「当事者の思い」、「当事者との関係性の良さ」、「サービス利用者と提供者の双方の視点」から構成された。

3) 就労支援の流れと社会資源の理解

このカテゴリは12記録単位から形成され、記録単位数の16.4%に該当し、2つのサブカテゴリ「就労支援の流れと制度の把握」、「社会資源のメリット、デメリットの理解」から構成された。

4) 当事者のニーズの把握とそれにそった支援

このカテゴリは8記録単位から形成され、記録単位数の11.0%に該当し、2つのサブカテゴリ「当事者のニーズに合った支援」、「当事者の希望の把握とそれにそった支援」から構成された。

5) 他職種、他機関との連携の必要性

このカテゴリは5記録単位から形成され、記録単位数の6.8%に該当し、3つのサブカテゴリ「他職種との連携の必要性」、「他機関との連携の必要性」、「家族や他職種との連携の必要性」から構成された。

6) 生活者としての当事者理解

このカテゴリは4記録単位から形成され、記録単位数の5.6%に該当し、2つのサブカテゴリ「生活者としての当事者理解」、「当事者イメージの変化」から構成された。

7) リカバリーとしての就労

このカテゴリは4記録単位から形成され、記録単位数の5.6%に該当し、2つのサブカテゴリ「リカバリーとしての就労」、「就労、役割、生きがいの重要性」から構成された。

8) 信頼関係の重要性

このカテゴリは3記録単位から形成され、記録単位数の4.1%に該当し、2つのサブカテゴリ「信頼関係の重要性」、「職場の理解者の必要性」から構成された。

9) 就労につなげるプログラムや援助の重要性

このカテゴリは3記録単位から形成され、記録単位数の4.1%に該当し、2つのサブカテゴリ「就労につなげるプ

表2 学びの内容

カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位(抜粋)	記録単位数	
1 就労支援におけるOTのあるべき姿	就労支援におけるOTの役割と必要性	社会資源を活用し、当事者も援助者も一緒になってチャレンジすることが大切	12	21.9%
	様々な職務内容についての知識の必要性	就労支援を行うには職種について知っておかなければ、支援を行うことはできない	2	
	OTになった時の自己像	中身を知れば知るほど、本当に自分がOTになってもよいのか、援助できるのか不安になる	2	
2 当事者の視点と思い	サービス利用者としての当事者の視点	社会資源の内容や当事者がその資源を利用して良かったこと、つらかったことなど具体的なことが分かった	7	20.5%
	当事者の思い	精神障害者がどのように就労をして、その中でどのように感じていたのかを知ることができた	6	
	当事者との関係性の良さ	二人の様子を見て、とても仲良さそうだったのが印象的	1	
	サービス利用者と提供者の双方の視点	当事者とOTの話を合わせて聞けたため、就労について理解しやすかった	1	
3 就労支援の流れと社会資源の理解	就労支援の流れと制度の把握	当事者さんが就労に向けてどんな活動を行ってきたのか知ることができた	10	16.4%
	社会資源のメリット、デメリットの理解	リハビリや社会資源の活用など、実際の経験をもとに話を聞くことができた。それぞれの資源の長所、短所を体験談から知ることができた	2	
4 当事者のニーズの把握とそれにそった支援	当事者のニーズに合った支援	当事者の状態やニーズによりそった内容で就労支援を行い、様々な社会的資源を活用しながら社会復帰に向けて、支援することが大切	4	11.0%
	当事者の希望の把握とそれにそった支援	当事者に合った支援の仕方、相談へのり方など、実際の話を聞いて参考になった	4	
5 他職種、他機関との連携の必要性	他職種との連携の必要性	OT一人だけでは、就労・就学支援を行うことはできないので、他職種との連携が大切	3	6.8%
	他機関との連携の必要性	就労支援ではハローワークなど多くの事業が関わっている	1	
	家族や他職種との連携の必要性	本人だけではなく、その家族や主治医、担当スタッフと相談しながら治療を進めていくことが大切	1	
6 生活者としての当事者理解	生活者としての当事者理解	対象者が、発症してからの経緯と、就労まで行った内容と、離職してからの行動を学んだ	2	5.6%
	当事者イメージの変化	A氏が自分の意思をしっかり伝え、場を和ませるようなことを言ったりとお茶目な一面を見て、イメージが変わった	2	
7 リハビリとしての就労	リハビリとしての就労	仕事ができるようになるために一生懸命であり、社会復帰や就労というのは大事	3	5.6%
	就労、役割、生きがいの重要性	人が仕事をしたり、仕事をしている中で自分の役割や生きがいを見つけようとする大切さや重要性が何となくわかった	1	
8 信頼関係の重要性	信頼関係の重要性	信頼関係があるからこそ小さなことから大きなことまで相談することができ、就職へつながったことがわかった	2	4.1%
	職場の理解者の必要性	職場によるが先輩など理解のある人がいてよかったのではないかと	1	
9 就労につなげるプログラムや援助の重要性	就労につなげるプログラムや援助の重要性	規則正しい生活や体調管理など、デイケア内での活動以外でも就労を意識して、就労準備できるように取り組みがなされていることがわかった	2	4.1%
	就労支援の重要性	就労支援の重要性を学んだ	1	
10 就労前・後のサポートの重要性	就労後のサポートの重要性	就労した後、当事者の相談などをスタッフが受けるのは当事者にとって安心して職場に向かうことのできる一つの要因	2	4.1%
	就労前のサポートの重要性	就職前に支援を行うポイントを見つけることが大切	1	
計			73	100%

プログラムや援助の重要性」, 「就労支援の重要性」から構成された。

10) 就労前・後のサポートの重要性

このカテゴリは3記録単位から形成され、記録単位数の4.1%に該当し、2つのサブカテゴリ「就労後のサポートの重要性」, 「就労前のサポートの重要性」から構成された。

3.2 「今後の自己の課題」の内容分析結果

「今後の自己の課題」の記述は63記録単位に分割できた。

このうち抽象度が高く、意味不明の記述を除く、57記録単位を分析対象とした。次に、サブカテゴリに集約し、さらに高次の概念でカテゴリ化を行った結果、カテゴリが形成された(表3)。研究者2名による信頼性の検討の結果、スコットの一致率はそれぞれ76.9%、71.6%であった。

1) 就労支援に関する知識・技術の体得と理解

このカテゴリは21記録単位から形成され、記録単位数の36.8%に該当し、6つのサブカテゴリ「就労支援の知識の体得と理解」, 「社会資源の理解」, 「支援技術の体得」, 「就

表3 自己の課題

カテゴリ	サブカテゴリ	記録単位(抜粋)	記録単位数	
1 就労支援に関する知識・技術の体得と理解	就労支援の知識の体得と理解	OTとしての特性を生かせるように十分な知識を身につけたい	8	21 36.8%
	社会資源の理解	就労にかかわる制度の理解を深めること	6	
	支援技術の体得	観察力や検査を正確に実施し、解釈する技術や考え、当事者との関係を築くコミュニケーション能力が必要	2	
	就労支援技術の体得	就労までの見学方法や相談やアドバイスの仕方を身につけたい	2	
	就労支援のイメージ化	就労支援で実際にどのようなことを行っているのか自分の目で見たい	2	
	他職種との連携	他職種と連携し、施設でのリハビリから社会への橋渡しになること	1	
2 知識不足の自覚と学習の必要性	知識不足の自覚と学習の必要性	社会資源について、まだあまいになっている部分があるので、しっかり理解したい	7	12 21.1%
	疾患の理解	当事者の疾患である統合失調症やうつ病について、より、理解しなければならない	5	
3 当事者の思いや特性に適した援助(クライアント中心の援助)	当事者の思いにそった援助	対象者の気持ちになって、活動内容や治療計画を立てれるよう努力したい	5	10 17.5%
	当事者に適した就労支援	対象者一人一人と向き合い、その対象者の特徴を捉え、その人に合った援助や社会資源を提供できるようにになりたい	3	
	個別性の理解	当事者に合わせ、工夫して作業を効率よく行う視点を持つこと	1	
	多面的な当事者理解	当事者に適した職場を探すためには、当事者を多面的に知っている必要がある	1	
4 将来のビジョンを持つこと	将来のビジョンを持つこと	当事者の方の夢をかなえることの手伝いをできるよう、当事者の特性に合う支援ができるOTになりたい	4	5 8.8%
	将来を見据えた知識の体得	明確な目標を持って、そのための努力をすること	1	
5 様々な職務内容の理解の必要性	様々な職務内容の理解の必要性	今後、就労支援を上手くできるように、就労支援について知識をつけたりいろいろな職業について興味を持つこと	3	4 7.0%
	様々な職務内容の体得	アルバイトや仕事をしている人から、仕事に関する知識を増やしたい	1	
6 自己の省察	自己の省察	実習に行ったときに、目の前の対象者に自分が何ができるのかを理解し、行動できるスキルを身につけること	4	4 7.0%
7 社会人としての対応・マナーの体得	社会人としての対応・マナーの体得	社会人としての対応やマナーなどをアルバイトや実習で身につけたい	1	1 2.1%
計			57	100%

「就労支援技術の体得」、「就労支援のイメージ化」、「他職種との連携」から構成された。

2) 知識不足の自覚と学習の必要性

このカテゴリは12記録単位から形成され、記録単位数の21.1%に該当し、2つのサブカテゴリ「知識不足の自覚と学習の必要性」、「疾患の理解」から構成された。

3) 当事者の思いや特性に適した援助(クライアント中心の援助)

このカテゴリは10記録単位から形成され、記録単位数の17.5%に該当し、4つのサブカテゴリ「当事者の思いにそった援助」、「当事者に適した就労支援」、「個別性の理解」、「多面的な当事者理解」から構成された。

4) 将来のビジョンを持つこと

このカテゴリは5記録単位から形成され、記録単位数の8.8%に該当し、2つのサブカテゴリ「将来のビジョンを持つこと」、「将来を見据えた知識の体得」から構成された。

5) 様々な職務内容の理解の必要性

このカテゴリ4記録単位から形成され、記録単位数の7.0%に該当し、2つのサブカテゴリ「様々な職務内容の理解の必要性」、「様々な職務内容の体得」から構成された。

6) 自己の省察

このカテゴリ4記録単位から形成され、記録単位数の7.0%に該当し、1つのサブカテゴリ「自己の省察」から構成された。

7) 社会人としての対応・マナーの体得

このカテゴリは1記録単位から形成され、記録単位数の2.1%に該当し、1つのサブカテゴリ「社会人としての対応・マナーの体得」から構成された。

4. 考察

本研究の結果、「学びの内容」については学生の回答か

ら10カテゴリ、「今後の自己の課題」については7カテゴリが形成され、スコットの式により算出した一致率は70%以上であった。このことより、各カテゴリが分析結果として、信頼性を確保していることを示した。

以下に、当事者参加型授業の学びの内容、学生自身の自己の課題、さらに当事者参加型授業の授業形態と教育効果について考察する。

4.1 当事者参加型授業による学びの内容

当事者参加型授業の目標を「OTとしての役割や援助内容について理解し、当事者の視点から就労の意味や援助内容などの理解を深めること」としており、本研究の結果から、この目標は達成できたと考える。例えば、OTの役割や援助内容としては、「1) 就労支援を実施する際のOTのあるべき姿」、「3) 就労支援の流れと社会資源の理解」、「4) 当事者のニーズの把握とそれに沿った支援」、「5) 他職種、他機関との連携の必要性」、「10) 就労前・後のサポートの重要性」の5カテゴリが得られ、体験談を語るスタッフC氏がモデルとなり、援助者としてどのような知識や技術が必要なのかについて、理解を深めることができたことが推察できる。更に、本研究では当事者と援助者の両者が体験談を語り、語りの内容だけではなく質疑応答での両者のやり取りや雰囲気から、両者の関係が良好なことが見て取れ、「8) 信頼関係の重要性」についても学生が感じ取っていたことがわかる。

当事者の視点としても、「2) 当事者の視点と思い」や「6) 生活者としての当事者理解」が示すように、A氏がどのような視点や思いを持って就労準備や就労していたのか、また、生活者としての当事者をイメージしながら体験談を聞いていたことが推察できる。生活のしづらさ⁸⁾を抱えながらも前向きに生きていく姿を目の当たりにし、語られる言葉だけではなく、当事者から醸し出される非言語的な雰囲気を学生は敏感に感じ取り、当事者へのイメージがポジティブに変化し、当事者理解が深まったと考える。先行研究^{6,7,9)}においても、当事者参加型授業の実施によって当事者イメージが変化すると述べられており、本研究でも同様の結果が得られた。このように、当事者参加型授業は情意的領域にも効果が認められることが示唆された。

「7) リカバリーとしての就労」というカテゴリは、OTとして重要なカテゴリであると考えられる。近年、精神障害領域では、リカバリーの重要性について論じられているものが多い¹⁰⁻¹²⁾。リカバリーとはAnthony W.A¹³⁾が提唱した概念であり、「回復は当事者の中で生まれるもので、本人が行うことである」としている。就労援助学の講義の中

でもリカバリーのプロセスとして、働くことは重要な役割を持つことを教授していた。A氏の語りから、改めて働くこととはどのような意味を持つのか、更に、働くという作業が人にどう影響するのかという、作業科学の観点からも考えを膨らませることができたことは大きな成果であるといえる。

4.2 当事者参加型授業から得た自己の課題

「1) 就労支援に関する知識・技術の体得と理解」、「2) 知識不足の自覚と学習の必要性」、「5) 様々な職務内容の理解の必要性」の3カテゴリが示す通り、当事者参加型授業を受講した後の自己の課題は、知識や技術面の理解、つまり認知的領域が過半数を占めた。学生は現状ではまだまだ知識不足であると実感していた。更に、対象者に適した支援ができるよう自分なりに知識を組み合わせ、展開する力が不足していることに気づきを得ていた。

また、「3) 当事者の思いや特性に適した援助(クライエント中心の援助)」が示す通り、当事者の思いや特徴を捉えることの重要性に改めて気づいたことが伺える。これまでの講義等を通して、当事者の思いに則した援助をすることを頭では理解できていたが、当事者からの生の声を聞くことにより、五感を通じて感じることはできなかったのではないかと考える。

更に、「4) 将来のビジョンを持つこと」、「6) 自己の省察」が示す通り、学生が今後自分はどのようなOTになりたいのか、自己の将来像を膨らませる一助となった。山下¹⁴⁾は「学生は当事者参加授業をとおして、妊婦が語る日常生活を想像体験から創造体験へと発展させている」と述べている。当事者の生活だけではなく、学生自身の将来像を創造させることにもつながったと考える。

以上のことから、当事者参加型授業を通して、学生は自己の現状を振り返るきっかけとなり、知識・技術の不足を実感し、自己の課題が明確になったと考える。

4.3 当事者参加型授業の教育効果と授業形態

柴田²⁾は、独自の視点から当事者参加型授業の教育効果(表4)について述べている。これは、仏典の「開」「示」「悟」「入」といった内面化プロセスを切り口に作成した、梶田¹⁵⁾の日本版の教育目標のタキノミーと、中谷らの当事者参加型授業の教育効果を参考に作成された。本研究で得られた学びの内容と、当事者参加型授業の教育効果を照合すると、認知的領域では「示」の「当事者の立場に立った対象理解」、「悟」の「理論がいかに実践に生かされているかを理解」と「専門職としてのあり方の認識」が本研究

表4 当事者参加型授業の教育効果

	認知的領域	情意的領域	精神運動的領域
開		<ul style="list-style-type: none"> ・当事者へのイメージの変化 ・当事者に勇気づけられ敬意を払う姿勢 	
示	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者の立場に立った対象理解 	<ul style="list-style-type: none"> ・できない自分, 分かったつもりになっていた自分への気づき 	<ul style="list-style-type: none"> ・当事者の立場に立った援助技術
悟	<ul style="list-style-type: none"> ・理論がいかに関に実践に生かされているかを理解 ・専門職としてのあり方の認識 	<ul style="list-style-type: none"> ・主体的で創造的な学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・チームで協業する援助技術
入	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の人生観, 世界観を構成する一部となる 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの意味感を持って日常的にさまざまなことをやる(ボランティアなど) 	<ul style="list-style-type: none"> ・行動や生活の一部となる

2)より引用

の教育効果として挙げられると考える。「当事者の立場に立った対象理解」には学びの内容の「2) 当事者の視点と思い」が該当し(記録単位の割合: 20.5%), 「理論がいかに関に実践に生かされているかを理解」には、「3) 就労支援の流れと社会資源の理解」, 「4) 当事者のニーズの把握とそれにそった支援」, 「9) 就労につながるプログラムや援助の重要性」が該当し(記録単位の割合: 31.5%), 「専門職としてのあり方の認識」には「1) 就労支援におけるOTのあるべき姿」, 「5) 他職種, 他機関との連携の必要性」, 「8) 信頼関係の重要性」, 「10) 就労前・後のサポートの重要性」が該当すると考える(記録単位の割合: 36.9%)。また, 情意的領域では「開」の「当事者のイメージの変化」が教育効果として挙げられ, 「6) 生活者としての当事者理解」, 「7) リカバリーとしての就労」が該当すると考える(記録単位の割合: 11.2%)。以上から, 本研究の教育効果として「専門職としてのあり方の認識」が占める割合が大きいと推測できる。その要因として, 当事者と援助者の両者が参加したことが挙げられる。当事者と援助者の両者の語りから, 社会資源や援助内容を理解しただけではなく, 質疑応答時の両者の様子や雰囲気からも関係性の良好さを読み取ることができたためと考える。

当初, 著者らは情意的領域の「当事者に勇気づけられ敬意を払う姿勢」にも効果が認められると予測していた。しかし, 「学びの内容」の中でも「自己の課題」の中でも, このようなカテゴリ得られなかった。先行研究では, 1, 2年次に開講している科目の1コマに, 複数の当事者が参加しているものが多い。つまり, 当事者が1名であったことや, 援助者が加わったことで「専門職としてのあり方の認識」の効果が大きくなったために生じた結果であると考ええる。また, 今回の当事者参加型授業を, 3年次という学

習が進んだ中での実施であったことも要因の一つであると考える。本学の学生は, 2年次で3週間の臨床実習を経験しており, 全ての学生が精神障害を対象とした実習ではなかったものの, 臨床実習で直に当事者と触れ合う中で当事者の力を感じていたのではないかと推察された。

以上のことから, 当事者参加型授業の教育効果のどこに狙いを定めるかによって, 開講年次や授業に参加する当事者と援助者の数が決まってくるものと考ええる。「専門職としてのあり方の認識」を教育目標に掲げた際には, 当事者と援助者の両者が参加し, 「当事者に勇気づけられ敬意を払う姿勢」に重点をおく場合は, 比較的早期の学年に実施し, 複数の当事者の参加が望ましいことが示唆された。

今後の課題として, 精神障害領域の臨床実習を体験していない学生もいるため, 経験値によって認知的領域, 情意的領域の教育効果に違いがあるのかについて検証が必要である。

本研究の限界として, 2年次の臨床実習での体験が, 情意的領域にどのような影響を及ぼしたのか検証がなされていないことが挙げられる。

5. 結語

障害者就労に関する科目の中で, 当事者参加型授業を実施し, 聴講した学生にはどのような効果があるのかについて, 学生より得た「学びの内容」と「今後の自己の課題」について内容分析を用いて検討した。その結果, 「学びの内容」については10カテゴリ, 「今後の自己の課題」については7カテゴリが抽出された。当事者参加型授業では認知的領域だけではなく, 情意的領域に効果が認められることが示唆された。

最後に、本研究にご協力下さいました A 氏とスタッフ C 氏、学生の方々に深謝致します。

文献

- 1) 山梨日日新聞. “薬害の怖さ直接学ぶ.”2004年9月9日.
- 2) 柴田貴美子：病や障害を抱えた当事者が語る「当事者参加型授業」の現状と教育効果に関する文献レビュー. 文京学院大学保健医療技術学部紀要 3：23-31, 2010
- 3) 岩崎テル子：作業療法士の養成教育 現状と問題点 作業療法教育研究会の立場から. 作業療法 24 (1)：16-20, 2005.
- 4) 小嶋健一：作業療法士養成教育における障害当事者の授業参加に関する研究 障害当事者参加型授業による学生の情意領域への影響. 高浜専門学校紀要 2：3-10, 2009.
- 5) 舟島なをみ：質的研究への挑戦 第2版. 医学書院, 2007
- 6) 藤井博英, 坂江千寿子, 清水健史他：看護教育研究 精神看護学における当事者参加型の授業効果. 看護教育 48 (4)：348-353, 2007.
- 7) 中谷千尋, 森川三郎, 野澤由美他：精神障害当事者が参加する授業の効果 授業終了後の学生のレポートから. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 9 (1)：49-60, 2004.
- 8) 臺弘：生活療法の復権. 精神医学, 26：803-814, 1984.
- 9) 平田直美, 牛ノ濱幸代, 末吉朋：当事者の「語り」を導入したアルコール依存症の講義の評価. アディクション看護 4 (1)：21-27, 2007.
- 10) 香田真希子：「働くこと」の意味. 臨床作業療法, 5 (5)：380-385, 2008.
- 11) 中原さとみ, 飯野雄治編著：働くこととリカバリー IPS ハンドブック. かもがわ出版, 2010.
- 12) 池田真砂子, 山本俊爾：IPS:個別職業紹介とサポート. 精リハ誌, 14 (1)：24-31, 2010.
- 13) Anthony W.A：精神疾患からの回復：1990年代の精神保健サービスシステムを導く視点. 精リハ誌, 2(2)：145-154, 1998.
- 14) 山下貴美子, 伏見正江, 森越美香他：当事者参加型授業を発展させるための取り組み 母性看護学における当事者参加型授業の学習効果. 山梨県立看護大学短期大学部紀要 10 (1)：31-43, 2005.
- 15) 梶田叡一：教育評価 第2版補訂2版. 有斐閣双書, 2010.

The Educational Effects of College Classes Involving the Active Participant Who Has the Sickness and Disorder:

Kimiko Shibata, Takamasa Mizuno, Masami Yasunaga,
Yaoko Kurosawa, Ryosuke Miyadera

Department of Occupational Therapy, Faculty of Health Science Technology,
Bunkyo Gakuin University

Abstract

The purpose of this study was to clarify the educational effects of class provision with active participation of concerned persons involved (patients) on the understanding of students. After the class, questionnaires learned context and self-progress in the future were given, and 32 students answered with free-description. The data were analyzed using the Berelson content analysis method. The result brought about 10 categories of contents of learning and 7 categories of self-progress. The students understood the professional role and support as OT. They also noticed the meaning of employee and support from the viewpoint of active participation. The students realized shortage of professional issues on engagement and support, and somehow found the importance of combination of obtain knowledge with its application to clients. The results also suggest that the class has effects on cognitive domain and emotional domain.

Key words —— classes involving active participation, educational effects, narrative

Bunkyo Journal of Health Science Technology vol.5: 15-23